

書評と紹介

井上順孝・阪本是丸編著

『日本型政教関係の誕生』

第一書房 一九八七年二月二日刊
B6判 三八三頁 三、〇〇〇円

森岡清美

この本は、国学院大学日本文化研究所に拠って、明治期の宗教行政にかんする共同研究を精力的に展開してきた、五名の中堅・新進研究者の論文を収録している。論文はいずれ劣らぬ意欲作であるが、書名は少し分かりにくい。「日本型政教関係」とは何を指すのであろうか。書名とほぼ同じ題名を掲げた巻頭論文によると、明治政府が創出した「国家のイデオロギー的要請を負担しうる安定した政教関係」（八頁）を意味する。本書に収録された各論文は、そのような政教関係の誕生を、とくに明治維新前後から帝国憲法発布までの激動の時代について、重要な個別的問題に焦点を据え、かつそれぞれさらに時期を限定して考察している。

編著者の「まえがき」によると、五つの論文が取り扱ったテーマを配列の順にいえば、(1) 教部省時代およびその後における宗教政策がどのようなダイナミズムの中に形成されたかをめぐる問題、(2) 神祇官から神祇省にかけての時期の祭政一致の理念がどこに発し、どう具体化することになったかという問題、(3) 帝国憲法制定時の宗教行政のあり方に影響を与えた、井上毅の政策関係についての構想と、内務省の施策にまつわる問題、(4) 真宗の大教院からの分離を唱えた島地黙雷の信教自由論の背後にある神道観の問題、(5) 教派神道の一派である神道大成教の初代管長平山省齋が、幕臣から神道家となっていく過程をめぐる問題、である。最初の三篇は、宗教行政の背後にある理念と、それがどのように変形して実施されていくかに関心の焦点があり、残る二篇は、宗教行政に間接的な関わりをもった宗教家の思想や活動を規制していたものに、主たる関心がある。

二 つぎに各論文について概観してみよう。

(1) 「日本型政教関係の形成過程」（阪本是丸、全七六頁）は、巻頭論文であるとともに本書の基調論文でもあり、また(2) および(4)の後続二論文を射程内に含む労作である。その内容は、「国家と宗教が最も直接に向かいあっていたと考えられる明治四年から九年まで」の時期について、政府がいかにして「日本型政教関係」を創出しようとしたかを説明するこ

とを課題として、神祇官から神祇省へ、神祇省から教部省への展開と、教部省時代の政教関係を分析したものである。資料的制約ゆえにややもすれば法制史的考察に墮しかねないところを、この時期の神祇行政史の専門家である筆者は、資料の博搜と眼光紙背に徹する読みの深さにより、とりわけ異なる政策理念を担う藩閥的人脈間の角逐に鋭い視線を配ることによって、単に神祇といわず、仏教を含めての政教関係を政治の動き全体のなかで活写することに成功している。

(2)「近代天皇祭祀形成過程の一考察―明治初年における津和野派の活動を中心に―」(武田秀章、全六〇頁)は、維新政府の神祇行政において、王政復古・天皇親政に即応した新しい祭政一致の制度を創出することが、長州藩の盟友である津和野藩主従の使命であった、という基本的観点に立って、神祇官の再興から廃止に至る展開を考察した論文である。津和野派が、五ヶ条御誓文の誓約式、即位式、孝明天皇三年祭、神宮親拝式、国は一定奉告祭などの新儀を、宮廷祭儀を司ってきた公卿堂上の抵抗を排除しつつ立案し執行してきた足跡を追い、彼らが「祭」の側面から維新政府の基本政策を積極的に推進したことを明らかにして、明治四年の国家祭祀の再編成、つまり神祇官祭祀から天皇親祭への移行は、彼らにとって不可避の課題であったと結論し、神祇官の廃止に至る過程についての新しい解釈を提出している。

(3)「明治憲法制定期の政教関係―井上毅の構想と内務省の政策を中心に―」(新田均、全五二頁)は、明治一六年頃から

の憲法制定準備期に焦点を合わせ、この時期に内務卿山県有朋の求めに応じて参事院議員井上毅がまとめた宗教政策の構想と、宗教行政の主管官庁たる内務省が実施した具体的な政策とを比較検討することにより、両者の基本的認識が一致していることを明らかにする。すなわち、政治と宗教は本来列々の領域に属するものであるから、政府は宗教と一定の距離を保ちつつ必要に応じて対処しうる制度を採用すべきである、という認識である。内務省はこの認識に基づき井上構想を参考にしながら従来の宗教政策の見直しを行った。かくて、仏教や教派神道には管長制を採用して一定の自治権を与え、キリスト教には未公認ながら信仰の自由を許し、また、神社には「宗教に非ず」との解釈によって宗教類似の行為を禁止する一方、「人民ノ尊信ノ上ニ独立」させるとの考えから、国家との関わりを将来極めて限定したものにする方針を打ち出した、と結論している。

(4)「真俗二諦論における神道観の変化―島地黙雷の政教論のもたらしたものの―」(藤井健志、全四四頁)は、親鸞以来の「神祇不拜」の伝統をもつ浄土真宗では、幕末維新期の復古神道の抬頭という仏教にとつての危機状況下でも、近世以来の王法為本・真俗二諦の建前が堅持され、勤王を主張し神国思想を積極的に受容した場合、神道的要素は俗諦として受容された、とする。島地については、海外渡航前に草した「教部省開設請願書」では、王法為本・真俗二諦の論理が集約され、廃仏の時期は神道と仏教の対立としてより政府と仏教との齟齬として捉えられ、その解決の方途として教部省の設置が提唱され

た。しかるに渡航後、明治五―六年の段階で書かれた「三条教則批判建白書」「大教院分離建白書」では、王法と神道の要素とを切り離して、王法為本は貫くが、神道の要素は真諦を脅かすものとしてこれを拒否しうる論理が展開され、かくて本願寺は改めて真俗二諦を主張することができるようになった、と結論している。

(5)「幕臣から維新期神道家へ―平山省齋の座標転換―」(井上順孝、全五八頁)は、幕府倒蹶直前に若年寄並外国総奉行にまでなり、明治一五年神道大成教が一派独立したときその初代管長となった平山省齋を取り上げ、幕府高官であった省齋がどのような過程をへて宗教家へと方向を転換したのか、宗教界に身を投じて以降の省齋がどのような状況の下で教団結成の道を選んだのか、また、省齋の宗教性はどのような特色をもつものであったか、を考察している。第一点は、旧幕時代の省齋をめぐる人間関係のネットワークが、彼の転身につながるに関わったかという、評者にはとくに興味深い角度から問われている。省齋が新政府によって罪を免ぜられて後、教部省に身を置き、さらにその後神道界で活躍するようになった契機として、教部大輔穴戸璣と古くから懇意であったことに加えて、神道の教正のなかに板倉勝静(松山藩主)、稲葉正邦(淀藩主)、遠藤胤城(陸軍奉行)、永井尚服など、幕閣で同僚関係にあたった人々が何人もいたこと、が挙げられている。

三

以上、収載論文の個々について概要を手短に記したが、最後に全体にたいする感想を付記しておきたい。「まえがき」にも述べられているように、この共同研究の基本姿勢は、先行研究を足がかりとしてさらに細かな実証的な研究を積み重ね、従来見過ごされてきた側面にも注目していくことであった。それがお題目に終わらず、どの論文でも実現されていることに敬意を表したいと思う。これによって新鮮な設問が提出され、読者の興味をひきつける論述の展開が可能となっているからである。

さらに「まえがき」は、現実には政策として表面に出た動きのみならず、水面下の様相がどうかにも注意を払わなければならぬ、としている。資料では裏付けえないが、そうであったに違いないと思われる動き、つまり「水面下の様相」に接近するのであれば、研究に生命が通わない。しかし、これはまことに容易ならぬことで、もし研究者が自らの洞察力を過信するとき、この企ては忽ち陥穽を掘ることになる。恐らく、共同研究による資料の博搜と注意深い相互点検が、この錯誤から研究者を救っているのであろう。こうして本書は、未解明の問題点の多い明治初期政教関係の研究に、新たな道標を樹立したものと、総括することができるのである。

この本の末尾に、資料篇(全七〇頁)として(維新期の神祇行政を担った)要職一覽、教部省官員録、内務省社寺局官員録、官社神官一覽、教導職(権少教正以上)一覽が収録されている。

これはまことに重宝なものである。その有り難さはこの種のリストを作成しようとした者でなければ、痛感されないのかもしれないが、今後多くの研究者がその恩恵に浴することであろう。この本から多くのことを学んだ評者としては、このグループがその有利な地歩を最大限に活用して、さらなる成果を挙げることが期待する次第である。

(一九八七、八、二)

世俗化論を越えて？

——「第十九回国際宗教社会学会」報告——

阿部美哉
中野 毅

さる八月二十五日から二十九日にかけて、西ドイツのチュービンゲンにて「第十九回国際宗教社会学会」(XIXth CISR)が開催された。この会議に日本からは、田丸徳善、阿部美哉、安斎伸、藪田稔、宗像巖、ヤン・スインゲドー、桐村泰次、中野毅ほか計十一名が参加した。以下、今回の総合テーマと各セッションでの論議の大綱、理事会報告、今後の展望等について報告する。

【総合テーマをめぐって】

今回の総合テーマは「世俗化と宗教—持続する緊張—」であり、CISRとしては初めて「世俗化論」を真正面にすえて検討する会議であった。と言うと、多くの読者には奇異に聞こえるかも知れない。CISRでは世俗化の論議が支配的であったと言う印象を拭えないからである。しかし、二年毎に行われてきたCISRのテーマは実際は分散しており、必ずしも「世俗

化」の問題を正面から取り上げたわけではなかった。例外としては、一九七九年に行われた「CISR東京会議」の第一セッションで「世俗化の概念と実態」と題して取り上げた程度である。それにも関わらず、そうした印象が残るのは、世俗化がまさに現代の欧米における宗教の最も顕著な問題の一つであり、他の問題が考慮されているときでさえ、無視する事の出来ないものとなっていたからだといえよう。

面白いことに、世俗化論が正面から取り上げられた理由は世俗化がより顕著になったからではなく、世俗化論によったのは昨今の宗教と社会の変化が捉えきれないという批判が寄せられてきたからである。その主なものは、世俗的な意味体系は伝統的宗教に代わることはできず、その結果、宗教の危機と共に「世俗性の危機」も生起しているのではないか。伝統的な宗教が異なった形態で新たなテーマと結び付いて復活していないか。近代社会の経済的、政治的、社会的諸制度が宗教的内容を帯びてきており、現代の世俗的シンボリズムが宗教的形態を利用しているとは言えないか。新宗教運動はそれ自体が現代社会における宗教の重要性を証明しているのではないか等であった。

これらの疑問を検討し、従来の世俗化論を批判的に検討しようというのが、今回のテーマであったといえる。このような問題設定のもとに全体討議の四セッションが設けられた。各セッションのサブ・テーマと報告者は以下の通りであった。

第一セッション 世俗性の危機——理論的側面

T・ルックマン「超越の社会的再構成」

F・イザムベール「倫理への回帰―ポスト・世俗化の事実?」

第二セッション 宗教的価値と世俗的価値―第一次および第二次社会化間の緊張

P・クーザン「フランス・カトリック系高等中学生の宗派的アイデンティティ」

F・ガレリ「分化した社会における青年と信仰」

L・ヴォワイエ「青年と宗教的結婚―聖なるもの解放?」

S・ヴルカン「脱・世俗化の記録―社会主義社会における宗教変動の三シナリオ―」

第三セッション 社会の世俗化または聖化の道具としての社会運動

R・ウォリス「新宗教と世界の再呪術化への力」

M・マクガイア「個人主義と自己救済―カリスマ運動と疑似宗教運動―」

M・マキオツティ「カトリック国における新宗教運動」

第四セッション 世俗化概念の非西洋社会への適用可能性

D・ハービニューレガー「社会運動における宗教の働き」

田丸徳善「世俗化概念と東洋における妥当性」

J・ヴォル「イスラム社会における世俗化」

Y・イザール「ヒンドゥー社会―世俗化は物語の一部」

B・ウィルソン「非西洋世界における世俗化」

第一セッションは、現代社会の変動とそれに伴って問われている宗教社会学の問題に理論的に取りくむものであった。従来、発展した社会においては世俗的な世界観、世俗倫理、世俗的象徴が伝統的宗教に取って代わると考えられていたが、宗教が果たしていた機能をそれらが必ずしも代替しているとは言えないことが明らかになった。とすると、伝統的には宗教によって充足されていた諸機能を保持することなしに、社会はどのように存続し得るのか、また如何なる社会的構造物が、如何なる方法でこれらの機能を代替しているのか。このような問いへの理論的検討がこのセッションの課題であった。

ルックマンは彼の現象学社会学の基本テーゼに沿って、議論を展開した。宗教の普遍的な人間学的機能は自然的有機体としての人間を人格へと形成し、歴史的社会的秩序（社会的現実）へ社会化することであり、この社会的現実の核となるものは社会的に構成された超越的現実（transcendent reality）である。この超越的現実とは人間の超越的経験の具体的形態を決定するが、同時にこの社会的構成物は原初の人間の原型的超越的経験の再構成体であるという弁証法的関係を為して再生産されて行く。このような観点から、超越経験とそのサインやシンボルにおける再構成、儀礼の機能を論じ、如何なる社会にあっても超越的社会的構成が存在することを示した後、問題は現代の加速度的に進行している社会的文化的変動において如何なる形態でそれが表出しているかであると考察した。

それは「古い」宗教の変容と「新しい」宗教の出現として特

微づけられる。前者は特に新興国家において顕著であるが、政治と宗教の相互影響の増大、さらに、人間生活の深い次元に再び関わりだしているという意味における「制度宗教の宗教化」として要約できる。他方、宗教の「私化」は依然として欧米を中心に進展しており、私化され、制度化されない意味体系としての「見えない」新しい宗教形態が、伝統宗教に取って代わっている。但し、この意味体系においては個人の主観的意図に応じた宗教的テーマの恣意的組合せ (bricolage) が増大しており、また超越の空間が現世志向になってきているという意味において、現代は「超越の萎縮」「主観主義の膨張」「プリコラージュの増大」として特徴づけられると指摘した。

ルックマンのこのような理論的展開に対して、フランスのイザムベールは今日「世俗化」が最も微妙な問題となっている領域として「倫理」、特に「現代医学の倫理」の領域を取り上げた。本人は欠席したので、代読された報告に基づいて議論されたが、その問題提起の要旨は次のようなものであった。倫理の世俗化は、特に公的権力がそれを管理しようとするときに顕著になる。今日、フランスやアメリカでは墮胎、避妊、安楽死、臓器移植と人体実験、それと関連した「死」の判定などの生命倫理の問題を巡って、政府がリーダーシップをとりながら世俗的な權威によって道徳基準を作ろうという論議が盛んであり、その委員会には神学者も組み込まれている。しかし、フランスに限って言えば、カトリック教会の努力は、性関係と生殖の秩序の問題において倫理の世俗化を防止するなど一定の成果を

生んだが、基本的には「被造物としての人間の尊厳性」を訴えることぐらいいしか出来ず、教会は倫理問題に関わることで全くマージナルな立場にたたされた。具体的な倫理問題に対する公式のカトリック教会の立場の不適合性が明らかになったといえよう。しかし、生と死の境界に関わる「どの段階から人間と言えるか」「どの段階を死と認めるか」等の存在論的問題については、フランスにおいてもアメリカにおいても、神学者の意見が尊重されている。このことは多元主義的の社会においては、倫理問題も寛容の原則から哲学的宗教的信念の尊重という原則が逆に有効になっていることを意味している。但し、存在論的関心が宗教的告白の主要問題であるかどうかは疑問である、というものであった。

第二セッションの中心テーマは、青少年の社会化におけるアイデンティティ形成に関する問題であった。これまで家族が若者の社会化の中心的機関であったが、今日、その家族も崩壊しつつある。そのような状況にあって、若者の価値観及びアイデンティティはどうか変化し、何によって形成されているのか。宗教的アイデンティティは、果して衰退しているのか。社会化の正当な機関であった家族、学校、教会は現在どの様な位置にいるか。個人的及び社会的アイデンティティの間に、緊張が生じているのではないか、という問題であった。

クーザンはフランス西部のカトリック系高等学校(リセ)の生徒五千人を対象に、彼らのアイデンティティがどの程度

宗派的アイデンティティーから規定されているか、すなわち宗派への所属から規定される信仰内容と規範を内面化しているか調査した。その結果、「堅固な信者にして規則正しい実践者」

「信仰心の無い者」「実践を欠く者」「並の信者かつ実践者」の4グループが区別されるが、第一のグループは全体の一〇％であり、宗派的アイデンティティーと一致しているといえる。しかし、このグループにおいても、道徳的価値の面でカトリックが禁じている結婚前の同棲に五一％が賛成し、信仰の内容においても二六％が死後の永生を断言できず、一五％が復活祭の意味を知らず、実践の面でも二六％がミサにいく必要はないと答えるなど、信仰の風化と実践の個人化が認められることを示した。他のデータもふまえて結論として、カトリックにおけるイニシエーションの構造、即ち家族、儀礼、青少年の運動、教区等がすべて危機にさらされており、個人は制度という構造化された場ではなく、類似性を保つ種々の下位集団との交流の中から、即ち非構造的な社交の場から得られる諸要素の組合せによってアイデンティティーを作り上げようとしていると主張した。

ヴォワイエはベルギーのルーバン・カトリック大学生たちの「宗教的結婚」への好意的な態度を分析し、このような態度は教会の諸規則や信仰を尊重するからではなく、何よりもそれが家族というプライマリ・グループへの所属の記号であり、伝統的な社会的登録の指標であるからである。つまり、両親を安心させ、家族の伝統を尊重することによって両親との結合を

確かなものにするが故であり、さらに、彼らなりの合理的思考から夫婦関係の形成という通過儀礼を聖化し道徳的な意味を付与したいという欲求の表現であるという二重の意味をあきらかにした。

ガレリは宗教に対する若者のアム・ビヴァレントな態度はイタリアにおいても同様で、世俗化の過程がかつてより微妙で柔軟になっていると観察する。一方でカトリックの公式教義への信奉や宗教の実践、宗教的価値からの離反は明白であるが、多くの若者が宗教は世俗文化が与えてくれない究極の問題への解答を与え、アイデンティティー形成のモメントを与えてくれると考えている。そして宗教をより拡大された一般的な概念で捉える主観化の傾向と、宗教に対して寛大で選択的な、その意味で世俗化された態度が認められる。イタリア社会における宗教への執着は、まさに本源的アイデンティティーと日常的方向づけとの間の分裂のうちに巢食っている。このような文化的多元状況の中で若者はアイデンティティー形成に困難を感じてはいるが、その多様性と対立の間をすなやかに生きていくという。

以上の西欧カトリック社会における制度宗教の機能の弱化和宗教意識の変容という、その意味での世俗化の過程に対して、ウルカンは東欧社会主義社会の危機と「脱世俗化」(desecularization)を論じた。今日、社会主義国においては宗教復興と宗教の政治化とがダイレクトに結びついたポーランド型、宗教復興が社会生活の脱世俗化をもたらしたが、直ちに宗教の政治化には結び付かないハンガリー型、外圧に対抗するナシヨナリ

ズムを高揚させるため、独裁的世俗国家が伝統宗教と連合して新たな市民宗教を構成し、独裁国家のシステムの安定と正当性の増大を計るブルガリア型の三つのシナリオが見いだせるという。彼は、これらは「世俗性の危機」における「宗教的制度、行為、意識による近代社会と近代文化の再征服」としての反世俗化現象にはかならないと考察した。

第三セッションは、社会運動と世俗化または再聖化との関係テーマとした。今日展開されている社会運動は、間接的に聖なるものを追求しているものもあり、また宗教運動が世界の再聖化を促進するのみならず、世俗化を推進する場合もある。この事実は何を意味しているのか。社会の価値の危機の表現か、グローバルな社会の新たな規範の必要を意味しているのか。

ハービュールレガーはエコロジー運動、平和運動、女性解放運動、市民権運動などをデュルケーム的な集合的意味の生産運動とみて、世俗化や聖化との関係を検討した。なかでもエコロジー運動のような「自然への回帰」を呼びかける運動には、共同体と外的世界、秩序と無秩序のような二分法的世界観が見られ、それが聖なるものと俗なるものとのシンボリックな対立を構成している。このような二分法は「宗教的に」構成された世界観であり、運動が宗教的性格を帯びてきていることを示していると主張した。マクガイアも中流階級に受容されている新しい宗教的治療運動を検討しながら同様の問題に迫っており、多くの信仰治療運動の世界像と信仰儀礼において、「全体論的」

(Holistic)個人表現の新しい形態が見いだせると主張する。信仰治療は全体論的理念にいたる一つの道であり、その広範な受容は社会構造と個人との関係の変化をもたらすと示唆する。

一方、マキオッティはカトリック国イタリアにおける新宗教運動と世俗化との関係について考察し、ハレ・クリシュナ、サイエントロジー、統一教会などの東洋的神秘主義運動には、カトリックが提供もせず満足も与えない深い精神性と、自己と世界についての統合的理解、共同体感覚がある。そのような新しい靈性の表現には、イタリアの支配的な宗教的伝統との不連続性ばかりでなく連続性があるために人々に受け入れられるのであるが、いずれにしてもそれは西洋の資本主義社会と伝統的宗教体系への挑戦であると論じた。

以上の三人が、それらの運動に社会の再聖化をもたらす可能性を見ているのに対し、ウォリスは、今日の新宗教運動の信徒は多くがマージナルな人々であって既存社会への敵意が加入の動機を為しており、運動それ自体も極めて近代化している。従って、これらの運動がかつて宗教が担っていた「生活の方法」としての地位を獲得することはありえず、世俗化への部分的挑戦、ないし不毛な挑戦的態度を装っているものにすぎないと論じ、そこには世俗化の過程を逆転させる力はないと強調した。

第四セッションのテーマは、これまでの世俗化論議が主として欧米のキリスト教社会を対象に行われていた傾向を反省し、世俗化理論が非キリスト教社会にも適用可能なのか、イスラ

ム、ヒンドゥ、仏教の社会では世俗化が起こっているといえるのかどうかを問うものであった。田丸は、「世俗化」の概念自体が西欧キリスト教社会を背景とした文化的制約を受けたものであり、直ちに他の歴史的分脈に適用は出来ない。従って、日本には確かに伝統的な宗教の変容という意味での世俗化は認められるが、それは西洋キリスト教の場合と同じ仕方での世俗化とは認められないと主張し、世俗化の総合的な研究のためには比較史的な視野が必要であり、また人類の宗教史全体の中で捉え直すことが必要と強調した。

田丸が主として概念の限定性と研究方法上の問題を指摘したのに対し、ウォルとイザールはそれぞれイスラム社会インド・ヒンドゥ社会の実体的分析から世俗化概念はここでは意味を為さず、そのような過程は生起していないと主張した。ウォルによれば、イスラムとは単なる宗教ではなく、政治的秩序であり、経済システムであり、生活方法そのものである。そこでは聖と俗とが分ちがたく結び付いている。従って、世俗化を例えれば「国家」と「教会」の分離と見なすなら、「教会」の存在しないイスラム社会には適用できないし、聖と俗の分化が進み、俗への志向性が強くなる過程を言うなら、それも当てはまらない。但し、イスラム社会においても政治制度と宗教制度との制度的分化は進行しており、世俗化を全ての社会における社会―歴史的な変動過程と広い概念で捉えるなら、その概念の有効性は見いだせないものでもないという見解であった。一方、イザールによれば、ヒンドゥイズムは全体的な社会秩序 (holistic

social order)、ないしインド文化そのものであるもので、西洋的な意味で宗教を分離して捉えることは出来ない。世俗化を宗教の衰退と捉えるなら、インドにおいては宗教的に規定された諸価値は、政治を始め様々な近代領域においても未だ力の源として強力に機能していると強調した。

このような諸報告に対し、ウィルソンは世俗化概念の混乱を指摘し、彼の言う世俗化過程とは社会システムとその運営における宗教の重要性の喪失である。その過程の最も重要な源泉は、何よりも科学技術の発展とそれに伴う生活諸領域の合理化であり、それは必然的に宗教の変容を伴うのであって、同様の過程は多くの社会に起こり得ると主張した。そのような観点から言えば、たとえイスラム社会であろうと、ヒンドゥ社会であろうと、例えばテレビの普及とそれに伴う生活様式や文化の変容は起こっており、社会諸制度の運営が宗教的原理によって為されているとは言えない。日本においても同様であろうと反論した。

【論議の諸問題】

総合テーマの下での各セッションの報告と議論の大纲は以上の通りであった。質疑も含めた各セッションの討議を通して全体として言えることは、先ず第一に、西洋社会と言っても、それ自体が社会制度の面でも宗教制度及び歴史的文化的な面でも、極めて多様で多元的であることが浮き彫りになったことである。従って「世俗化」理論も、その立論の前提は多様であっ

て、西洋の長期的な社会文化史のある局面を理解する上での概念として意義はあるとしても、今日の大きな社会変動、宗教変容の多様性を説明するための統一的概念とすることは困難であることが明確になったように思われる。

第二に、今日西洋世界は大きな文化的社会的変動期にあり、宗教との関係における変動のシナリオは、太筋においてルックマンが描いた線に沿っているように思われる。新宗教運動や宗教集団の行う社会運動においては、宗教的要素と世俗的要素との干与する複合的発酵作用が起こっており、ホリステイックな世界観に基づく共同体志向型の運動が多くみられる。それらが単なる反抗に止まるか、世界の再聖化を可能にする運動に展開するかについては評価の分かれるところである。

第三に、ヨーロッパではやはり未だに組織宗教の存在が大きく、それを無視しては宗教社会学は語れないとの観を改めて強くした。この点については、主催国の西ドイツの宗教事情についての共同報告によって特に強く印象づけられた。西ドイツではプロテスタントとカトリックというキリスト教の二教派が政府と契約（コンコルダート）を結び、完全な自治権を認められ、かつ政府の収税機関の助けを借りて信徒から教会税を徴収しており、政治的にも経済的にも未だ安定した大勢力として存続している。そのほか、青少年及び老人の社会教育や福祉活動にも大きく貢献しており、決して一概にキリスト教会の衰退とは言えない状況であることが明らかにされた。但しその一方で、今日のヨーロッパにおける宗教変動を理解するには、制度

化されない民衆文化や民衆宗教を捉えなくてはならないと主張する意見もマールブルグ大学のM・バイ教授などから多く述べられ、そのような側面からの研究の重要性を強調するプリストルのベイリー教授らによって、“Network for the Study of Implicit Religion”が組織されていることは注目に値する。

第四に、非キリスト教社会の「世俗化」について正面から取り組んだことは評価できるが、その議論では世俗化概念の多義性、不統一が浮き彫りにされ、むしろ研究者の国際交流を進め実証的研究成果を踏まえて討議を深めることの必要性を痛感した。西洋社会と非西洋社会の宗教文化との比較・文化的研究の精緻化、発展の重要性が痛感された。これらはC I S Rの今後の課題と言えよう。

【理事会報告】

大会の最終日二十九日にC I S R理事会がチュービンゲン大学社会学部において行われ、柳川啓一氏の後を引き継いで日本代表の理事になった阿部美哉が出席した。議事の大綱は、次回及びその後の大会について、今後のC I S Rの改革について等であった。

次回大会については、ヘルシンキでの開催が絵会で承認されたのを受けて、日程は一九八九年八月二十八日から九月一日までを第一案とし、八月二十一日から二十五日までを第二案としてさらに折衝、準備を進める。総合テーマとしては「公的領域における宗教—個人化か政治化か」をかけた、プレナリー・セ

セッションのサブ・テーマとしては「福祉国家と宗教」「国民国家と宗教」「国家と宗教運動」「宗教と平等」「諸宗教の出会い」などを案として検討中であることが報告され、年末までにローカル・コミティーが原案を起草して各理事に送付することが確認された。これらの案件については来年二月の次回理事会にて決定する。

なお次回理事会では、本学会をより実りあるものにするため宗教社会学の動向や全般的研究状況についてレビューを行うことが確認された。またその他の、CISRRの今後の活性化と充実を計る方法についても活発に議論され、大会でのプレナリー・セッションの方法の再検討、改革のための作業部会の設置、定期刊行物の刊行、『ソーシャル・コンパス』との相乗り、ACTSの改善などについて検討が加えられた。

なお、一九九一年の大会の開催地については、LSEのバーカー理事より日本でやってみようかとの積極的推挙があった。遠方であることや経費の点で多くの問題があるが、条件さえ整えば不可能ではなく、二月の理事会めざして可能性を検討していくことになった。

【今後の展望】

今回の大会の特徴は、非西洋社会の問題がこれまでになく注目された点にあり、それに伴って、これまでになく日本からの積極参加が目だった大会であった。総合テーマに関する第四セッションで東大の田丸教授が報告したことは既に述べたが、そ

の他個人発表の部でも上智大学の宗像教授が「非有神論的宗教文化における世俗化」と題して、また中野も「占領と日本宗教制度の改革―戦後日本社会の世俗化過程の一考察―」と題してそれぞれ発表した(田丸、中野論文は後述の『東洋学術研究』に収録)。

さらに今回のテーマと関連させて、(財)東洋哲学研究所が『東洋学術研究』二六一号で特集「世俗社会と宗教」対立を越えて―をくみ、英語版も発刊した。今回のテーマが「世俗性と宗教」という西洋的三元論からの発想を脱却していないことから、柳川啓一教授の「BEYONDの思想」を基調に論陣を張ったものである。会場でも広く配布され、宗教社会学への日本からの積極的体系的な貢献として高く評価された。また、一九七九年以来、同研究所の後援で日本からの参加者が主催する「ジャパン・ディナー」も盛会であった。欧米の研究者の間にも歴史や言語の違いからくる微妙な違和感が存在するが、このディナーの極めて友好的雰囲気は、その様な文化的民族的な壁を取り払い、共同研究者集団としてのある種の連帯感を醸成するのに大きく貢献しているといえよう。

また、非西洋社会への関心はCISRRがヨーロッパ中心の学会から本格的に脱皮し始めたことを物語っている。その積極的な努力は、事務局がローザンスに置かれカムピッシュ事務局長が就任して以来特に目だってきたと言える。今回はその成果が出始めた大会であった。具体的には、彼の努力によってインドやラテン・アメリカ諸国など南半球からの新たな参加者が増え

始めたこと、I A H Rや米国のS S S Rとの連携を強めていく方向が確認され、一九九〇年ローマで開催される次回I A H Rの宗教社会学部会に積極的に参加して行くことなどが事務局長パイ教授らとの間で話し合われたこと、さらに会員数の増加が見られたことなどにそれは現れているといえる。しかしそれだけに、C I S Rは真の意味での国際学会として発展し得るのかその可能性と存在意義が今問われているといえ、開催地についても参加し易い南半球でも行うべきだという、南米の研究者からの意見などにどの様に対応できるかが課題である。従ってこの段階で日本で正規の大会を開催しようという意見が出たことは、C I S Rおよび宗教社会学の発展にとって望ましいことであり、また実現できれば、日本の宗教研究を国際的な研究協力の場で発展させる上での良い機会になると考えるものである。

会報

○第四六回学術大会開催

日本宗教学会第四六回学術大会は九月一六日(水)～一八日(金)にかけて、立教大学において以下の日程で開催され、五六〇人の参加者、二五八人の研究発表があった。なお、公開講演、研究発表要旨は、本誌次号(大会紀要号)に掲載される。

九月一六日(水)

学会賞選考委員会 一二時—一四時

公開講演会 一五時—一七時

皆川達夫氏(立教大学教授)

「東と西・宗教と音楽」

『宗教研究』編集委員会 一七時—一八時

理事会 一七時三〇分—一九時三〇分

九月一七日(木)

開会式 九時三〇分—一〇時

研究発表 一〇時—一二時、一三時三〇分—一七時

評議員会 一二時—一三時

九月一八日(金)

研究発表 九時三〇分—一二時、一三時三〇分—一六時—

〇分

評議員選考委員会 一二時—一三時三〇分

『宗教研究』編集委員会一二時—一三時

総会・閉会式 一六時二〇分—一七時四〇分

懇親会 一八時—二〇時

○学会賞選考委員会

日時 昭和六二年九月一六日(木) 正午

場所 白雲閣(もみじの間)

出席者 上田賢治、岡田重精、金井新一、長谷正当、早島鏡

正、松本皓一、山形孝夫

議題

一、候補作品の審査

審査の結果、本年度の日本宗教学会賞(第二十二回)候補として、次の者を推薦することに決定した。

安^{やす}酸^{かた}敏^{とし}真^{まこと}(日本生産性本部海外技術協力部)

Toshimasa Yasukata, Ernst Troeltsch: Systematic Theology of Radical Historicity (American Academy of Religion, Academy Series No. 55), Scholars Press, Atlanta, Georgia, 1986.

(推薦理由)

今回受賞の対象となった安酸氏の英文著作(総頁二一九)は、同氏が昭和六十年に、アメリカ合衆国ヴァンダービルト大学に提出した学位論文(Ph. D.)であるが、それはさかのほれば、同氏の京都大学大学院時代に着手された長年月にわたる一貫したトレルチ研究の集大成であり、その貴重な研究成果である。

同氏の著作に示された、緻密にして着実、詳細にして明解な

トレルチ解釈は、しばしば錯綜をきわめ、多岐にわたるトレルチの業績を、全体として統一的、総合的に捉えなおすことに成功しているが、それだけでなく、現代という時代が、キリスト教にたいして突きつけている問題に対応して、トレルチの視点を、さらに一層鋭く掘りさげ、それを明解な論旨と立論の展開によって、十分説得的に提示することにおいても、すぐれた力量を示している。

安酸氏のトレルチ研究は、それを一言で要約すれば、トレルチの全著作ならびに膨大な二次文献にたいする綿密な検討を踏まえ、トレルチ神学の発展過程の多様な局面を正確に追跡することによって、そのなかに一貫して流れる根本思想に迫ろうとするものである。

周知のように、トレルチの神学は、カール・バルトを中心とする弁証法神学が、世界を風びした四十年間、十九世紀的自由主義神学の、いわば成れの果として、故国ドイツの神学界においてさえ、正当な評価を認められぬまま、ほとんど無視され、忘れ去られてきた、と言っても過言ではない。しかるに、リチャード・H・ニーバーが、その若い日に、いみじくも予言したとおり、一九六〇年を境に、トレルチにたいする関心は急速に高まり、今日、西欧キリスト教、界に、一種のトレルチ・リバイバルともいふべき現象が現に進行中である。

それを安酸氏は、弁証法神学が、キリスト教思想界に支配的な力を發揮しつつあった時代、それによって隠蔽され、切り捨てられてきた問題が、歴史的状況の推移のなかで、新たなレリ

ヴァンスを獲得し、再び立ちあられてきた結果であるとみなし、その地平に、同氏のトレルチ研究の出発点を位置づける。

このような枠組をとおして浮上するいくつかの問題のなかで、同氏は、トレルチの生涯をとおして彼の心を捕えて放さなかった、近代における「歴史と規範」との衝突という問題に注目する。知られるように、この「歴史と規範」との衝突は、近代歴史主義によって惹起された問題である。同氏は、トレルチ神学の深層部分に、この問題にたいするトレルチ自身の格闘の跡をさぐりあて、それを「ラディカル・ヒストリカリティー」として明らかにとりだすことによって、トレルチ自身における問題解決へのあるべき姿を提示するのである。

錯綜したトレルチの思想にたいする同氏の分析の手法は着実であり、その論述も平明で説得力に富んでいる。安酸氏の、こうしたトレルチ研究は、一九六〇年以降のトレルチ・リバイバル現象のなかにあつて、その慎重にして綿密な研究法とともに、すぐれて独創性豊かな研究として注目され、単に英語圏のみならず、西ドイツに本部をおく「トレルチ学会」においても、高い評価を獲得している。

以上の評価を踏まえながら、われわれ委員会は、同氏が今後の研究においてトレルチの問題を宗教学的課題として受けとめ、如何なる仕方で開催されるか期待して止まない。

以上の理由により、われわれ審査委員会は、同氏の業績が、これまでの我が国におけるトレルチ研究の歴史に貴重な一頁を加え得るにとどまらず、それを、国際的水準に高めるすぐれた

業績であると評価し、昭和六十二年度日本宗教学会にふさわしい候補としてここに推薦する。

昭和六十二年 九月十六日

学会賞選考委員

上田賢治、岡田重精、金井新二、長谷正当

早島鏡正、松本皓一、山形孝夫（長）

○理事会

日時 昭和六十二年九月一日（水）午後五時半

場所 白雲閣

出席者 赤池憲昭、赤司道雄、井門富二夫、池田昭、石田慶和、上田賢治、植田重雄、雲藤義道、大屋憲一、岡田重精、小野泰博、海辺忠治、金井新二、鎌田純一、楠山春樹、窪徳忠、雲井昭善、坂井信生、坂本弘、佐木秋夫、桜井秀雄、桜井徳太郎、佐々木宏幹、高崎直道、竹中信常、田中英三、田丸徳善、塚本啓祥、土屋博、中川秀恭、中野幡能、中村瑞隆、橋本芳梨、華園聰麿、藤井正雄、藤田富雄、堀越知巳、松長有慶、松本皓一、松本滋、真野龍海、山折哲雄、山形孝夫、脇本平也、渡辺宝陽

議題

一、庶務報告

金井常務理事より昭和六一年度の庶務報告がなされ、承認された。

一、会計報告

金井常務理事より昭和六一年度の収支決算報告と昭和六二年度的予算案が提出され、承認された。（別記参照）

一、評議員選考委員選挙の結果について

田丸徳善選挙管理委員長より、評議員選考委員選挙の結果過ならびに結果について報告があった。

一、日本宗教学会賞について

山形孝夫選考委員長より、審査結果の報告がなされ承認された。（別記参照）

一、新入会員について

別記二名が入会を承認された。

一、名誉会員について

本年度は、佐木秋夫、中村康隆の兩人を名誉会員として推薦することを決定した。

一、次年度学術大会開催地について

京都の仏教大学において開催されることになった。

○評議員会

日時 昭和六十二年九月一七日（木）正午

場所 立教大学五号館一二三教室

出席者 六七名

議題

一、庶務報告（金井常務理事）

一、会計報告（金井常務理事）

一、評議員選考委員選挙の結果について（田丸徳善選挙管理委員長）

○総会

- 一、日本宗教学会賞について(山形孝夫学会賞選考委員長)
- 二、次年度学術大会開催地について(脇本平也会長)

日時 昭和六十二年九月一八日(金)午後四時二〇分

場所 立教大学五号館一二三教室

出席者 大会参加者は四四〇名、定足数一四七名、出席者一九三名、よって総会は成立した。

議題

- 一、議長選出 藤田富雄氏を選出
- 二、庶務報告(金井常務理事)
- 三、会計報告(金井常務理事)
- 一、評議員選考委員選挙の結果について(田丸徳善選挙管理委員長)
- 一、日本宗教学会賞について(山形孝夫学会賞選考委員長)

山形孝夫学会賞選考委員長の説明の後、安酸敏眞氏に対する第二二回日本宗教学会賞の授与が会長によりなされた。

- 一、次年度学術大会開催地について。

京都の仏教大学において開催されることになった。

○『宗教研究』編集委員会

日時 (第一回) 昭和六十二年九月一六日(水) 一七時

(第二回) 昭和六十二年九月一八日(金) 一二時

場所 白雲閣

出席者 井上順孝、岡部和雄(第二回のみ)、笠井正弘(第

議題

- 一、二七三、二七四、二七六号編集方針
- 一、編集ガイドラインをめぐって
- 一、次回編集委員会の日程
- 一、旧新編集委員の交代

今西順吉委員に代わり関根清三氏、江島恵教委員に代わり木村清孝氏、金井新二委員に代わり島園進氏、山ノ井大治委員に代わり星野英紀氏が、それぞれ新たに編集委員になった。

○『宗教研究』編集委員会

日時 昭和六十二年一〇月一四日(水) 一八時

場所 学士会館本郷分館

出席者 井上順孝、岡部和雄、木村清孝、島園進、田島照久、鶴岡賀雄、星野英紀

議題

- 一、二七六号編集方針

- 二、その他

○理事会

日時 昭和六十二年十一月二八日(土) 午後五時

場所 学士会館本郷分館七号室

出席者 阿部美哉、荒木美智雄、上田賢治、大屋憲一、小川圭治、金井新一、窪徳忠、小山宙丸、桜井秀雄、島園進、鈴木康治、田丸徳善、中村廣治郎、奈良康明、堀越知巳、脇本平也

議題

一、新入会員の承認

新入会員として別記十一名の入会を認めた。

一、常務理事の互選

昭和六二年度の役員改選に伴ない、常務理事として次の方々が互選された。

安斉伸、井門富二夫、石田慶和、植田重雄、上田閑照、江島恵教、金井新一、坂井信生、桜井秀雄、島園進、竹中信常、田丸徳善、土屋博、華園聰麿、平井直房、藤井正雄、藤田富雄、前田専学、宮家準、脇本平也

一、その他に、会長任期の件、学術大会参加費および発表資格の件、賛助会員の件、新入会員の条件等について再検討の必要が指摘され、意見の交換が行われた。

○日本宗教学会役員名簿（昭和六二年一二月現在）

△会長▽脇本平也

△常務理事▽

植田重雄	安斉伸	井門富二夫	石田慶和
坂井信生	上田閑照	江島恵教	金井新一
田丸徳善	桜井秀雄	島園進	竹中信常
藤井正雄	土屋博	華園聰麿	平井直房
藤田富雄	前田専学	宮家準	
△理事▽	赤池憲昭	前田専学	宮家準
荒井献	荒木美智桂	池田昭	阿部美哉
伊藤幹治	伊原照蓮	池田昭	池田末利
雲藤義道	大峯顕	上田賢治	宇野光雄
		大屋憲一	岡田重精

小川 圭治	小野 泰博	海辺 忠治	葛西 実	河波 昌	川又 志朗	北森 嘉蔵	橘堂 正弘
金岡 秀友	鎌田 純一	楠 正弘	楠山 春樹	木村 清孝	久我 光雲	久保田 圭伍	倉沢 行洋
窪 徳忠	雲井 昭善	後藤 光一郎	小山 宙丸	小池 長之	光地 英学	神原 和子	孝本 貢
三枝 充應	坂本 弘	桜井 徳太郎	佐々木 宏幹	小林 円照	小林 信雄	酒井 サヤカ	佐々木 倫生
鈴木 範久	鈴木 康治	蘭田 稔	高崎 直道	佐藤 祖哲	佐藤 信行	佐藤 憲昭	塩入 良道
武内 紹晃	武内 義範	田島 信之	田中 英三	島本 清	J・スイングド!	鈴木 哲雄	管井 大果
玉城 康四郎	塚本 啓祥	寺川 俊昭	中川 秀恭	菅沼 晃	菅原 信海	鈴木 弘次	芹川 博通
中島 秀夫	中野 幡能	中村 廣治郎	中村 瑞隆	園田 坦	高木 きよ子	高橋 弘次	高橋 壯
奈良 康明	西村 恵信	野村 暢清	橋本 芳契	高橋 涉	武田 武磨	館 熙道	立川 武蔵
長谷 正當	早島 鏡正	平川 彰	藤田 宏達	田辺 正英	谷口 茂	谷口 龍男	田村 晃祐
藤吉 慈海	J・v・ブラフト	堀越 知巳	前田 恵学	田村 芳朗	月本 昭男	坪井 洋文	寺園 喜基
松長 有慶	松本 皓一	松本 滋	真野 龍海	土居 真俊	戸田 義雄	富倉 光雄	中祖 一誠
水垣 渉	水谷 幸正	武藤 一雄	森岡 清美	中野 毅	中牧 弘允	中村 恭子	長尾 雅人
柳川 啓一	山折 哲雄	山形 孝夫	山本 誠作	奈良 弘元	西村 浩太郎	西山 茂	早坂 博
幸 日出男	渡辺 宝陽	山形 孝夫	山本 誠作	原 実	平井 俊栄	平野 孝國	早坂 博
△監事▽	中村 元	古田 紹欽	安蘇谷 正彦	藤田 雅延	藤本 浄彦	北條 賢三	星野 英紀
△評議員▽	青山 玄	秋元 徹	池上 良正	星野 元豊	細谷 昌志	堀尾 賢三	星野 英紀
阿部 正雄	新井 昭廣	洗 建	池上 良正	間瀬 啓允	松塚 豊茂	松野 純孝	松前 健
池見 澄隆	石川 耕一郎	石田 充之	伊藤 唯真	松山 康國	丸野 稔	三谷 好憲	峰島 旭雄
伊藤 芳枝	稲垣 不二麿	稲葉 稔	井上 順孝	宮坂 有勝	宮田 元	宮田 登	村上 重良
今西 順吉	岩本 泰波	上田 嘉成	瓜生 津隆真	村上 真完	村野 宣男	森田 雄三郎	安居 香山
大垣 豊隆	大野 栄人	小笠原 春夫	小笠原 政敏	山口 恵照	山ノ井 大治	山本 和	横山 紘一
岡村 圭真	小川 英雄	加賀谷 寛	笠井 貞	D・リード	驚見 定信	渡辺 喜勝	
月光 善弘	勝又 俊教	加藤 智見	鎌田 茂雄				

会員計報

○日本宗教学会元会長、名誉会員、増谷文雄先生は、昭和六二年一月六日逝去されました。享年八四歳。ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

執筆者紹介（執筆順）

- | | |
|-------|--------------|
| 薄井篤子 | 九州大学大学院 |
| 宇都宮輝夫 | 室蘭工科大学助教授 |
| 勝又正直 | 東京大学大学院 |
| 小林紀由 | 日本大学助手 |
| 深澤英隆 | 東京大学大学院 |
| 森岡清美 | 成城大学教授 |
| 阿部美哉 | 放送教育開発センター教授 |
| 中野毅 | 創価大学助教授 |

昭和61年度 日本宗教学会 決算報告

＜収入＞		＜支出＞	
会費	6,844,120	会誌直接刊行費	5,130,000
賛助会費	850,000	会誌発送費	510,170
会誌売上金	45,000	編集諸費	390,543
第45回大会参加費	1,064,000	第45回大会費用	1,200,000
岸本・諸戸・		日本宗教学会賞賞金	100,000
石津・堀 基金利子	88,491	学会賞諸費	34,240
預金利子	80,327	選挙関係費	296,610
前年度繰越金	1,345,332	会合費	343,710
一時借入金	1,105,224	通信連絡費	366,300
		事務用品費	387,254
		印刷費	349,900
		本部費	1,809,200
		関係学会費	158,815
		国有財産借料	20,032
		会員名簿作成準備費	325,720
<hr/>		<hr/>	
計	11,422,494	計	11,422,494

昭和62年度 日本宗教学会 予算案

＜収入＞		＜支出＞	
会費	10,690,000	会誌直接刊行費	5,100,000
賛助会費	940,000	会誌発送費	510,000
会誌売上金	70,000	編集諸費	400,000
第46回大会参加費	1,000,000	第46回大会費用	1,200,000
岸本・諸戸・		日本宗教学会賞賞金	100,000
石津・堀 基金利子	80,000	学会賞諸費	30,000
預金利子	1,000	選挙関係費	300,000
出版助成金	400,000	会合費	300,000
		通信連絡費	350,000
		事務用品費	400,000
		印刷費	400,000
		本部費	2,000,000
		関係学会費	160,000
		国有財産借料	20,000
		名簿作成費	800,000
		一時借入金返済	1,105,224
		次年度繰越金	5,776
<hr/>		<hr/>	
計	13,181,000	計	13,181,000

The Dynamics of Scriptural Exegesis: Jacob Böhme's Interpretation of Genesis

Hidetaka FUKASAWA

ABSTRACT: While ignored within most historical studies of scriptural exegesis—including both those undertaken from the theological and church-historical standpoints—Jacob Böhme's interpretation of Genesis was both broad in scope and great in influence, and it involves issues which do not stop at scriptural hermeneutics, narrowly defined.

In this study, I have attempted to explicate the interpretation of Genesis found in three of Böhme's writings, each one of which is representative of a major period in Böhme's productive life. I have paid particular attention to the change in Böhme's exegesis, and have attempted to clarify these changes from the standpoint of the principle of interpretation involved, their form, and contents. This comparison of Böhme's exegesis in the three periods not only allows us to better understand the development and maturity of his understanding of Genesis, but also clarifies the enduring fundamental motive for his Genesis exegesis.

Böhme's primary interest in interpreting Genesis is in linking the various representations and history of Genesis to his own theosophical, natural-philosophical world-view. At the same time, that interpretation represented an attempt to overcome the deep gap between self and Genesis-as-scripture, a gap occasioned by various reasons inherent and extrinsic to tradition. As one part of a comprehensive interpretative activity, Böhme's Genesis exegesis was also a clear indication of a more general dynamic process of scriptural exegesis, one which was performed within the mutual dialectical restrictions of scripture and interpreter. And it can be assumed that the same kind of dynamics exists at the root of the general historical transmission of religious things.

Ignatius of Loyola's Theory of Obedience

kiyoshi KOBAYASHI

ABSTRACT: Ignatius of Loyola achieved a certain world view as a result of his mystical experience in Manresa. He indicated this experiential world view in his *Spiritual Exercises*, and energetically attempted to realize it through the activity of the organization The "Society of Jesus." The Society of Jesus had as its purpose the realization of Loyola's world view, and was organized so as to effectively function toward that end.

Within the Society of Jesus, Ignatius never ceased to emphasize the virtue of obedience. The principle of obedience played a pivotal role in the apostolic activities of the Society throughout the world and moreover in the union of Society as a single integrated body.

The virtue of obedience was given a multitude of meanings within Loyola's *Spiritual Exercises* and in his letters. But it is clear that the original purpose for emphasizing this virtue was related to the organizational form of the Society of Jesus, and was meant as a means of allowing the Society to function effectively.

Ignatius had no choice but to emphasize obedience within the Society in order to realize his world view, or to put it in other words, obedience was an indispensable element for the realization of Ignatius' world view. In this article, I study Ignatius' writings relating to obedience, and attempt to elucidate the meaning of this important term.

The 'Uniqueness' of the Anabaptism in "the Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism"

Masanao KATSUMATA

ABSTRACT: In *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, the fact that Weber places the Anabaptism alongside Calvinism as "a unique bearer" of ascetic Protestantism is due to the fact that Weber believed that the former was an inheritor of the primitive Christian belief in the "acosmic love," and because the latter was an inheritor of the tendency toward the establishment of order through a unified world view, which in turn was brought about through the "elimination of magic" originating in ancient Judaism. We can further confirm these two religious lineages by a recomposition of his postulated Jewish-Christian history centering on the primitive Christianity. The formation of a sect based on the "acosmic love" is an indispensable medium for the development toward modern society, but what is more fundamental is the fact that secular spheres were eliminated of magic through the formation of a unitary world view based on the Hebrew creator God, and that those spheres were allowed autonomous developments. It is also ironic that the result of that developments was a secularism within which the influence of religious sects was reduced. As a result, in his revision of "*the Protestant Ethic*" Weber later placed more emphasis on the importance of a "elimination of magic."

<**Key Words**> Anabaptism, "acosmic love"; Calvinism, "elimination of magic"; primary community; sect as a medium; paradoxical development; autonomous developments of secular spheres.

Life-cycle and the Attitude toward Life and Death

Teruo UTSUNOMIYA

ABSTRACT: It is often claimed that the fundamental function of representations regarding life after death or eternal life consists in easing fear and anxiety about death as universal human emotions, thereby preventing the irruption of instability into the pattern of everyday life, and making possible a positive attitude toward living. It is also often said that by relieving the anxiety and fear of death, such representations make it possible for individual human beings to accept their own deaths. According to such claims, the representations regarding life after death or eternal life are not only the source for people's positive way of living but also the source for people's ability to accept their own limited—and therefore mortal—human lives. This paper considers the human life-cycle theory of E.H. Erikson and the theory of the structure of the life-world suggested by A. Schutz in order to criticize the conventional views on the function of belief in the afterlife noted above.

The direction and support for human life is to be found not in abstract concepts like life after death, but within the concrete practice of human life. However, at the base of any specific form of human life practice lies a certain image of the "life-course," and that image forms the core of the community's world view. Various experiences and activities of human life are given meanings in terms of this image. It is within the process whereby life is given meanings that human beings can find their positive ways of living including the conditions making it possible to accept their own deaths.

The Process of Becoming a Female Religious Founder

Atsuko USUI

ABSTRACT: Nakayama Miki and Deguchi Nao can be considered representative female religious founders in Japan. This paper examines the kind of world view whose formation led to the process of change from *mikoto* foundress following their experience with spirit possession. As part of this study, I adopt the concept of “sexual self-recognition” which occurs as a part of psychological development, and try to show that these women’s world views and their views of human life were closely related to the axis of “sex.” Further, that their “principle of peaceful harmony” (*wagō no genri*) developed as the spontaneous internal value behind their religious behavior.

In addition, in order for the process of charismatic leadership to have a realistic base, the process of transmitting a religion to convert followers assumes the development of a common world view, together with an orientation toward realistic realization of that world view.

As a result, the purpose of this paper is to use the problem of the transmission and legitimation of charisma as a vehicle for considering the way in which the foundresses’ internal values developed within their later human relationships, and how those values stimulated the development of the women’s charisma as “religious foundresses.”